黄金の腕環

流星奇談

押川春浪

青空文庫

一　伯爵の別荘

流星の飛ぶのを見るのは、余り気味の好いものでは無い、シーンとした真夜中頃、青い光がスーと天空から落ちて来る有様は、恰も人魂でも飛んで来たよう、それが眼に入った瞬間は、誰でもハッと思い、流星の落ちたと覚しき淋しき場所へは、余程の勇士でも、何うも恐ろしくて行き兼ねると云う事だ。

然るにこの流星に関し、花の様に美しい一人の少女が、世にも面白い手柄を立てた話がある。

処は英国の或る海岸に、一軒の立派な家がある、之れは老貴族松浪伯爵の別荘で、伯爵は極く愉快な人物、それに三人の娘があって、いずれも絶世の美人と評判が高い。

頃は十二月三十一日の夜、明日はお正月と云う前晩だが、何不自由なき貴族の事とて、年の暮にテンテコ舞する様な事は無い、一家は数日以前から此別荘に来て、今宵も三人の娘は先程より、ストーブの熾んに燃える父伯爵の居間に集り、いろいろ面白い談話に耽って居る、その面白い談話と云うのは、好奇な娘達が頻りに聴きたがる、妖怪談や幽霊物語の類で、談話上手の伯爵が、手を振り声を潜め眼を円くして、古城で変な足音の聴えた事や、深林に怪火の現われた事など、それから夫れへと巧に語るので、娘達は恐ければ恐い程面白く、だんだん夜の更けるのも知らずに居った。

すると此時忽ち室の扉がスーと明いて、入って来たのは此家の老家扶で、恭しく伯爵の前に頭を下げ、「殿様に申上げます唯今之れなる品物が、倫敦の玉村侯爵家より到着致して御座います」と、一個の綺麗な小箱を卓子の上に戴せて立去った。

玉村侯爵とは松浪伯爵の兄君で、三人の娘には伯父君に当って居る、余程面白い人で、時々いろいろ好奇な事をする。

伯爵は侯爵の送って来た箱を開けて見て、

「マア、非常に綺麗な腕環が入って居る」と、夜光珠や真珠の鏤めてある、一個の光輝燦爛たる黄金の腕環を取出した。

一番年長の娘は、直ぐに夫れを父伯爵の手から借りて見て、

「まあ何んと云う綺麗な腕環でしょう、之れは屹度伯父様から、妾に贈って下さったのですよ」と云えば、二番目の娘は横合から覗込んで、

「いいえ、伯父様と妾と大の仲好しですもの、妾に贈って下さったに相違はありません」と争う。

三番目の娘は其名を露子と云う、三人の中でも一番美しく、日頃から極く温順な少女なので、此時も決して争う様な事はせず、黙って腕環を眺めて居る。

父伯爵は微笑を浮べて、

「イヤ待て、腕環は一個で、娘は三人、誰に贈るのか分らぬ、何か書付でも入って居るだろう」と、猶およく箱の中を調べて見ると、果して玉村侯爵自筆の短い書面が出た、伯爵は手に取って夫れを読み下せば——

一、この腕環は、玉村侯爵家に、祖先より伝われる名誉ある宝物なり、新年の贈物にと貴家に呈す、但し一個の外は無ければ、三人の令嬢の内、この年の暮に、最も勇ましき振舞を為せし人、この腕環を得べき権利あり、而して此腕環を得し人は、同時に更に多くの宝物を得べき幸運を有す、

と書いてあった。

二　三人姫君

「オヤオヤオヤ」と、一番目の娘と二番目の娘とは顔を見合せた。

伯爵は三人の娘の顔を打眺め、黄金の腕環を再び自分の手に取って、「玉村侯爵は相変らず面白い事をする人だ、この腕環は侯爵家の祖先照子姫と云う人の用いたもので、世の貴婦人達の羨む珍品である、之れを三人の娘の内、この年の暮に最も勇ましい振舞をしたものに与えると云う、然し年の暮と云えば、今日は十二月三十一日の夜、今夜中に誰が一番勇ましい事をするか、私は夫れを試験する役目を帯びて居る」

「何んな試験をなさるのです」と、一番目の娘は問うた。

「サア、何んな試験をしたら宜かろう」

二番目の娘は父伯爵の顔を見上げ、

「そして阿父様、玉村侯爵のお手紙に依ると、この黄金の腕環を得た者は、同時に更に多くの宝物を得べき幸運を有すと書いてありますが、その宝物とは何んなものでしょう」

「どんな物かは、夫れは後で分るだろう、兎に角私は今、頻りに今夜の試験方法を考えて居るのだ」と、快活なる伯爵は小首を傾けて、凝乎と窓から外を眺めて居る、何うも其様子が何んだか意味有り気なので、三人の娘も眼を上げて、窓の硝子を透して外を眺めると、今夜は朧月夜であるが、既に夜は更けて天地万物眠れる如く、遥か彼方の森林では、梟の鳴く声も聴え、実に物凄い程静かな有様である。

途端！　一同は思わずハッとした様子、それは何故かと云うに、今しも不意に一つの巨大な流星が空中に現われ、青い光は東から西へ人魂の如く飛んで、彼の梟の鳴いて居る森林の辺でスーと消えて仕舞ったのを見たからだ。

「マア何んと云う巨大な流星でしょう」と、一番目の娘も二番目の娘も眼を円くして叫んだ。

すると之れを見た伯爵は、忽ち何か考え出した様子で、

「オオ、面白い試験方法が胸に浮んだ」

「何んな試験方法です」

「他でも無い、あの流星と云うものは何んだか気味の悪いもので、それが落ちたと覚しき場所へは、余程の勇士でも其夜直ぐに行くのは厭がると云う、爾して昔からの口碑にも、流星の消えた場所には何か不思議な物が落ちて居ると云われて居る、夫れは本当か嘘か分らぬが、兎に角今あの淋しい森林の中へは流星が落ちた、和女等は未だあの森林の中へ入った事はあるまいが、随分変った場所だから、誰でも今夜あの森林を一番奥まで探検して、果して其様な不思議な物が落ちて居るか否か、最も正確に林中の模様を私に報告した者をば、今夜一番勇ましい振舞をした者と認め、私は玉村侯爵に代り此腕環を与える事としよう」

「まあ厭な試験方法ですこと」と、一番目の娘も二番目の娘も叫んだ。

「厭なら仕方が無い、権利を放棄する迄さ、其代り此腕環を貰う事は出来ないぞ」

腕環の貰えぬのは閉口である、「それなら参りましょう」と二人共答えた。

伯爵は三番目の娘の露子に向って、

「露子、和女は何うじゃ」

露子は此時初めて口を開き、

「ハイ、妾何んだか恐い様に思いますけど、阿父様の仰しゃる事なら参りましょう」

斯くて相談は定まり、三人の娘は一人ずつ流星の落ちた森林を探検する事となった。

先ず一番先に出かけたのは一番目の娘であったが、唯だ一人小さい角燈を下げて家を出ると、朧月夜に風寒く、家を離れれば離れる程四辺は淋しくなって、やがて森林の側まで来て見れば、林中は真暗で何んだか化物でも潜んで居るよう、何うしても踏み込んで探検する気にはなれず、一歩進んでは二歩退き、二歩進んでは三歩退き、其間に独り思うには、此林中には立木と草のあるばかり、流星が此処で消えたとて何んの不思議な物が落ちて居るものか、好奇に此様な気味の悪い森林に入るよりは此儘此処から家に帰り、阿父様に林中の有様を問われたら、森林を残る隈なく探検しましたが、唯だ立木と草のあるばかりで、不思議な物は少しも見えませんかったと答えよう、此方が余程利口であると、娘の癖に狡猾い事を考え、来る時の足の遅さとは反対に、飛ぶ様に家に帰って来た。

次に行ったのは二番目の娘であったが、此娘は姉様より更に臆病なので、森林の側まで行くか行かぬに早や身慄いがし矢張り姉様と同じ様な狡猾い事を考え、一目散に家に帰って来た。

三　流星の落し物

今度は三番目の娘露子の番である、露子とて年若き娘の身の、何んで夜の恐ろしさを感ぜずには居よう、けれど彼女は極く正直な性質なので、一旦父君に森林を探検して来ると約束した以上は、たとえ生命を取られても其約束を果さねばならぬと思い、森林の側まで来た時は夜もかれこれ十二時に近く、林中には相変らず梟の鳴声も聴えて、其物凄い事は限りもなかったが、露子は意を決して真暗な林中に入って行った、入って見ると、歩行も左程困難では無く、彼女は何んでも約束通り探検を果そうと思う一心に小さな角燈の光に路を照して彼方此方と歩いて居る内に森林の入口から凡そ四五町も来たと覚しき頃、前方に当り一個の驚くべき物を発見した、それは地上三尺ばかりの所に、一点の青い光が幽霊火の如く輝いて居るのである。

露子はギョッとして立止った、今頃この淋しい林中に、あんな光の点って居る筈は無い、実に不思議千万である、イヤ不思議なぞかりでは無く、誰でも恐ろしく思うだろう、露子は最う此処から逃げ帰ろうかと考えたけれど、夫れでは充分に探検したものと云われない、彼女は此場合にも父君との約束を胸に浮べ、妖怪であれ幽霊であれ、是非その正体を見届けねばならぬと決心し、静かに歩んで彼の青い光の直ぐ側に行って見ると、更に意外である、幽霊火と見えたのは其様な恐ろしい物では無く、一個の青色球燈が樹の枝に吊してあり、其真下の地面には、青い光に照されて、一尺四方ばかりの奇妙な箱が置いてあった。

「オヤ不思議だこと、先刻の流星が此様な物を落して行ったのではありますまいか、不思議と云えば此箱こそ実に不思議なもの、持って帰って阿父様に御覧に入れましょう」と、露子は其箱を持上げて

見ると非常に重かったけれど、夫れを両手に抱えて家に帰って来た。

三人の娘が尽く帰って来たので、父伯爵は一同其居間に呼び、先ず一番目の娘に向い、

「和女は森林を探検して、何も不思議な物を見なかったか」と問えば、一番目の娘は澄ました顔で、

「ハイ、林中には立木と草のあるばかりで、隈なく探検しても少しも不思議な物は見えませんかった」と答えた、二番目の娘も同じ様に答えた、すると伯爵は三番目の娘に向い、

「和女も矢張り不思議な物を見なかったか」

と云うと、三番目の娘露子は、携えて来た彼の奇妙な箱を室の隅から持出し、

「阿父様、不思議と云えば不思議でしょう、此様な箱が森林の中に落ちて居りました」と答えた。

伯爵は其箱を見、この答えを聴くより、忽ち露子の腕を取って、其腕に玉村侯爵から贈って来た腕環を嵌め満面に溢るるばかりの笑を湛えて、

「露子こそ最も勇ましき振舞をしたものだ、此腕環は和女の物である、爾して此箱も私が好奇の玉村侯爵の申込により、あの淋しい森林中に置いて、和女等三人の内、誰が一番勇ましいかを試したもの、侯爵の書面に『この腕環を得し人は、同時に更に多くの宝物を得べき幸運を有す』とあったのは、即ち勇気ある者が、此箱を取る事が出来ると云う事を意味するのだ、私は一つ此箱を開けて見せよう、之れも総て露子の物である」と云いつつ、隠袋から鍵を取出して其箱を開けば、中から出て来たのは、金銀宝玉の装飾品数十種、いずれも眩きばかりの珍品である。

一番目の娘も二番目の娘も、森林を探検し得なかった臆病が露顕して真赤になった。

明日はお正月！　露子は何の様に楽しい事であろう。

青空文庫情報

底本：「少年小説大系　第2巻　押川春浪集」三一書房
　　1987（昭和62）年10月31日第1版第1刷発行
底本の親本：「春浪快著集　第二巻」大倉書店
　　1916（大正5年）年9月11日発行
初出：「少年世界」
　　1907（明治40）年1月号
入力：田中哲郎
校正：noriko saito
2005年8月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黄金の腕環

流星奇談

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　押川春浪
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/